

令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号：33608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K11284

研究課題名(和文) 消滅危惧集落の一人暮らし男性高齢者が生活適応の限界を判断するプロセスに関する研究

研究課題名(英文) Processes of Judging Limits of Adaptation to Life in Elderly Men Living Alone in Disappearing Villages

研究代表者

藤川 君江 (FUJIKAWA, Kimie)

松本看護大学・看護学部・教授

研究者番号：20644298

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、消滅危惧集落の75歳以上の一人暮らし男性が生活適応上の限界を判断するプロセスを明らかにすることである。調査地域は、総務省が指定する過疎地域のうち、8地域を選定した。対象者は34名で、平均年齢87.05歳であった。居住地域は、人口減少により身近に頼れる人がいないが、介護保険の利用は考えていなかった。対象者は、視力低下と足腰の衰えを自覚しており、杖歩行者が3名いた。身体の衰えから一人暮らしができなくなる不安があった。また、居住地域に病院や商店がなく、運転免許証返納への葛藤があった。一人暮らしの限界は、身体の衰えに対する不安が強く、自力でトイレに行けなくなった時と判断していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、一人暮らし男性高齢者の生活課題は居住地域により違いがあり、居住地域の地理的・文化的特徴に基づいた支援が必要である。本研究を行うことで消滅危惧集落の一人暮らし男性高齢者の詳細な特徴が明らかになり、地域特性に応じた支援を示すことができる。一人暮らし男性高齢者を地域で支援することを保障する方策を問うことであり、一人暮らしが継続できる身体・心理・社会的状況の限界を明らかにし、孤立防止と地域特性を考慮した早期介入の意義と必要性を問うことである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was to clarify processes of judging limits of adaptation to life in elderly men over 75 years old living alone in disappearing villages. In depopulated- areas designated by Ministry of Internal Affairs and Communications (MIC), eight areas were selected as survey ones. The number of subjects was 34 elderly men. Their average age was 87.05 years old. Although they had no one they could rely on near them due to a population decline in the residential area, they didn't think about using long-term care insurance. They realized that their back and legs became weak and their eyesight got worse, and three of them walked with a stick. They worried that they wouldn't be able to live alone because of a physical decline. Besides, they had a conflict about giving up driver's license because there were no hospitals or stores around them. Thus, they judged the limits of living alone when they became unable to go to the toilet by themselves due to the physical decline.

研究分野：精神看護学

キーワード：消滅危惧集落 一人暮らし男性高齢者 後期高齢者 メンタルヘルス 一人暮らしの限界

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の高齢化率は上昇を続けている。2017年の高齢化率は、27.7%と3.6人に1人が65歳以上である。特に75歳以上人口は増加を続け、2018年には65～74歳人口を上回っている(内閣府、2018)。また、65歳以上の独居率は、1980年では男性4.3%、女性11.2%であったが、2015年には男性13.3%、女性21.1%と35年間で男性は3倍以上の増加である。2040年には男性20.8%、女性24.5%(国立社会保障・人口問題研究所、2018)になることが予測され、男性の一人暮らし高齢者は増加傾向である。

一人暮らし男性高齢者は、人との交流が少ない人や頼れる人がいないことで孤立しやすい状況にある(内閣府、2018)。孤立防止には、高齢者個人と近隣住民による地域づくりの必要性が報告されている(高野ら、2013)。日本の超高齢社会問題として都市部では、高齢者の孤立や孤独死がある。しかし、消滅危惧集落での報告はほとんどされていない。そのため、消滅危惧集落の一人暮らし男性高齢者が、生活適応上の限界を判断するまでの身体・心理・社会的状況のプロセスを明らかにすることで、孤立防止支援の早期介入が可能になると考える。

申請者のこれまでの消滅危惧集落の一人暮らし男性高齢者研究で明らかになったことは以下である。村落共同体意識が残っており、助け合って生活している。健康維持を考え、食事は1日3食、農作業等で身体を動かしている。兄弟や子どもとの交流があり、孤独ではないと自覚している。一人暮らしができなくなったら、老人ホーム入所を考えている。消滅危惧集落の人々は、ポジティブ思考で生活していることが明らかになった。今までは近隣住民で助け合って生活してきたが、人口減少と高齢化率の上昇により近隣住民で助け合うことには限界があり、今後は難しいと考える。

2. 研究の目的

消滅危惧集落の一人暮らし男性高齢者が、生活適応上の限界を判断する身体・心理・社会的状況のプロセスを明らかにし、一人暮らしが可能である身体・心理・社会的状況の経時的変化に応じた支援システムのモデルの構築、その運用における地域特性を提示することである。

3. 研究の方法

(1) 消滅危惧集落の75歳以上一人暮らし男性にインタビューガイドを用いて半構成的面接調査を行った。インタビュー内容は、一人暮らしになった理由、現在の生活状況、現病歴・既往歴など現在の通院状況と自覚する健康状態、家族構成と家族に会う頻度、家族以外の人と会う頻度、生活するうえで困っていること、どんな時に孤独だと感じるか等について自由に語ってもらった。

(2) 消滅危惧集落と過疎地域近郊に居住する65歳以上の住民を対象に「ソーシャル・サポート尺度」を用いて質問紙調査を行った。分析はソーシャル・サポート得点を地域別、性別、家族有無についてクロス集計表を作成し、平均値差を比較するため、カイ二乗検定を行った。

(3) 福祉先進国のデンマークの高齢者入居施設の視察を行った。(1)と(2)の結果とデンマークの視察結果を保健医療福祉の多角的視点から高齢者を取り巻く社会状況を考察する。

4. 研究成果

(1) 調査地域と調査対象者(表1)

調査地域：総務省が指定する過疎地域であり、高齢化率が40%以上の集落を選定した。調査地域として選定したのは、熊本県旧槻木村、和水町、愛媛県久万高原町、長野県松川村、根羽村、旧四賀村、旧奈川村、福島県三島町であった。対象者の募集方法は市町村役場および社会福祉協議会の高齢福祉担当者に、研究の目的と方法を文書と口頭で説明し紹介を受けた。

調査方法：75歳以上で自立した生活を送っている一人暮らし男性にインタビューガイドを用いて、半構成的面接を行った。高齢であることを考慮し、1回50分以内とした。

調査内容：対象者の1日の過ごし方、買い物や通院の回数と手段、近隣住民との人間関係、家族関係、一人暮らしができないと判断する身体、心理、社会的状況などについて半構成的面接を行った。デ・タ解析は、テキストマイニングの手法を用いて計量テキスト分析システムKH Coder(Ver. 3.0.0)でクラスター分析を行った。対象者は34名、年齢構成は80歳～84歳11名、85～89歳11名、90～94歳11名、95歳以上1名、平均年齢87.05歳の34名であった。一人暮らしの要因は、配偶者と死別28名、離別2名、別居1名、入院中1名、未婚2名であった。定期的に医療機関に通院している者が31名であった。運転免許証保有者23名、返納者6名、非保有者5名であった。29名は、農作業・山林の手入れを継続していた。消滅危惧集落で暮らす一人暮らし男性高齢者の心理的葛藤(図1)は、【話し相手がない寂しさ】はあるが【家を離れたくない】と想っていた。しかし【身体機能の衰えの進行】を自覚しており【歩けなくなったら終わり】と覚悟を持って生活していた。ここで生活を継続するためには、車の運転が必需であるが高齢ドライバーであり【運転継続の葛藤】があった。車の運転ができなくなると【買い物へ行けなくなる不安】があった。対象者は80歳過ぎれば身体的衰えは仕方ないと

受け入れているが、自宅で生活継続ができなくなることへの危機感を持っていた。消滅危惧集落は人口減少と高齢化率の上昇により身近に頼れる人も少ないため、身体の衰えて歩行ができなくなり、トイレに行けなくなったら一人暮らしができないと判断していた。対象者は介護保険の利用を考えていなかったが、介護保険の利用を含めて対象者に情報提供する必要がある。一人暮らしを継続するためには、行政と地域住民だけではマンパワーの不足が考えられる。そのためには、家族や近隣のボランティアが協力し、地域で見守る体制を構築し、運用をすることで一人暮らしが継続できると考える。

表1 対象者の概要

地域	年齢	現病歴	運転免許証	配偶者	子	地域	年齢	現病歴	運転免許証	配偶者	子
九州	D	91 不眠	返納	死別	2	V	88 高血圧	有	死別	2	
	E	80 高血圧	有	離婚	4	信越 W	91 高脂血症	有	死別	2	
九州	F	84 高血圧	有	死別	2	X	90 なし	なし	死別	1	
	G	88 骨粗しょう症	有	死別	2	Y	80 心疾患	有	死別	2	
	H	90 狭心症/高血圧	有	死別	3	信越 Z	91 高血圧/高脂血症	なし	死別	2	
関東	I	84 高血圧/肺気腫	有	死別	0	a	90 通風/前立腺肥大	有	死別	2	
	J	82 心疾患/肝障害	なし	未婚	0	b	83 高血圧/膵臓がん	有	死別	0	
	K	88 高血圧	返納	死別	2	信越 c	89 網膜剥離	有	死別	2	
	L	86 糖尿病/高血圧	有	死別	2	d	80 高血圧	有	死別	2	
	M	86 糖尿病/高血圧	自動二輪	死別	2	e	90 糖尿病/緑内障	返納	死別	3	
	N	93 なし	有	死別	2	f	82 高血圧/肺がん	有	死別	3	
	O	86 糖尿病/高血圧	なし	死別	3	信越 g	88 白内障/緑内障	有	死別	2	
四国	P	82 なし	なし	死別	0	h	85 高血圧/脳梗塞	有	死別	4	
	Q	96 高血圧/膀胱がん	返納	死別	3	l	90 高血圧/白内障	有	死別	4	
	R	81 高血圧	有	別居	2	A	91 白内障/膝関節症	返納	死別	3	
東北	S	88 前立腺肥大/関節炎	有	死別	2	B	92 高血圧	返納	死別	3	
	U	87 心疾患/高血圧	有	死別	3	C	89 緑内障/高血圧	有	死別	3	

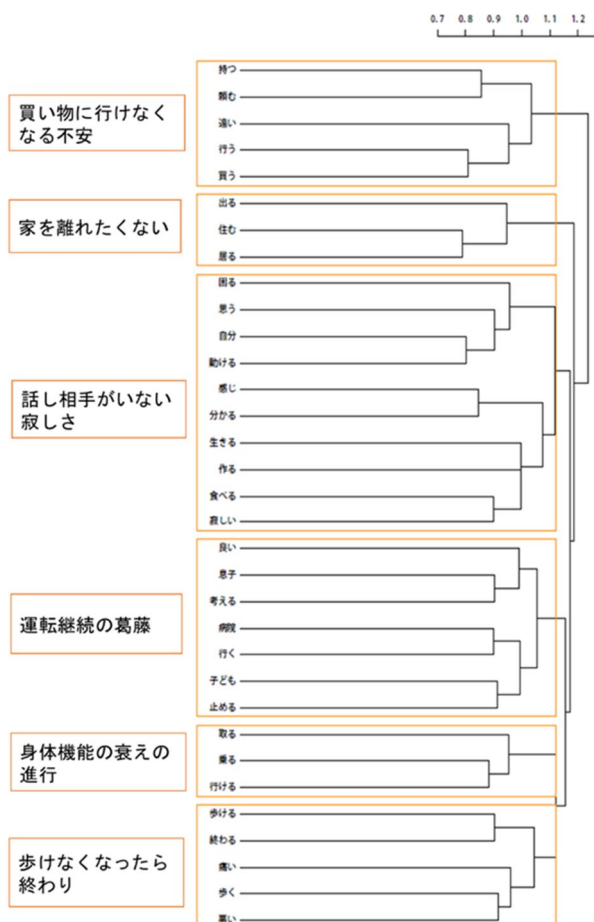


図1 階層的クラスター分析結果による形態素のデンドログラム

(2) 消滅危惧集落と過疎地域近郊の65歳以上の住民を対象にソーシャル・サポート調査

消滅危惧集落と過疎地域近郊の65歳以上の高齢者を対象にソーシャル・サポート調査を行った。得点範囲は0点～30点で、得点が高いほどソーシャルサポートネットワークが大きく、得点が高いほどソーシャルサポートネットワークは小さく、12点未満は社会的孤立を意味する。

調査結果は、消滅危惧集落の住民89名、過疎地域近郊22名で111名を対象とした。年齢は65歳～69歳5名、70歳～74歳16名、75歳～79歳20名、80歳～84歳29名、85歳～89歳30名、90歳以上11名、平均年齢83.5歳であった。ソーシャル・サポート得点の平均点は、消滅危惧集落14.5点、過疎地域近郊16点であった。消滅危惧集落と過疎地域近郊でソーシャル・サポート得点の平均値の差を知るため、カイ二乗検定を行ったが、 $p < 0.05$ で有意差があるとは言えない結果であった。また、性別、家族の有無についてもカイ二乗検定を行ったが5%水準で有意差が認められなかった。これらの結果は、消滅危惧集落と過疎地域近郊であってもソーシャル・サポートに違いがないと言える。消滅危惧集落の高齢者は、近隣住民からのソーシャル・サポートは少ないが、子どもからのソーシャル・サポートがあった。

消滅危惧集落は人口減少と高齢化率の上昇が顕著であり、ソーシャル・サポート得点は過疎地域近郊と比較するとソーシャルサポートネットワークが小さい結果であった。人口が特に少ない集落であるため、子どもからのソーシャル・サポートは重要であるため、子どもとの関係性を維持することが重要であると考えられる。

(3) デンマークは、日本や他の先進国と同じく高齢化という国家的課題に直面しながらも、社会の効率性と公平性の追求により国家の経済成長と社会保障の両立を実現してきた。その背景には、デンマークの政策イニシアティブと地域における市民参加型の社会システムがある。デンマークの社会は「成熟社会」とも呼ばれ、消費税が25%、所得税が50%超ではあるが、医療費、出産費、教育費等は無料である。福祉においても24時間介護サービスが受けられるなど、手厚い社会福祉サービスである。日本との最大の違いは、社会福祉にかかわる財源を全て税金で賄っていることである。そのため、高額な税率でも国民の満足度は高いことで知られている。本研究では、令和4年にコペンハーゲン近郊の高齢者入居施設 Ørsted plejecenter を視察した。高齢者入居施設に入所した理由は、高齢になり一人暮らしに不安を感じて、本人の希望により入所されていた。日本の高齢者施設では、起床時間、食事場所、食事内容、就寝時間などは、施設によって決められていることがほとんどである。デンマークでは入居者自身が、生活リズムを決めることができおり、自己の尊厳が保たれていた。高齢者住宅で入居者が快適に暮らすために、月に1回の施設長と入居者のミーティングが行われていた。入居者の困りごとや生活のルールもその場で解決していた。入居者が暮らす部屋は長年使っていた家具とベッドを自宅から持って来ることが可能であり、自宅での生活の継続性が実現されていた。

日本は、ますます人口減少と高齢化が進むことや一人暮らしの高齢者は増加することも予測されている。これからの保健、医療、福祉は、全ての国民の尊厳と自立性の支援が求められる。高齢になり一人暮らしになっても本人が望む地域で、望む生活を実現するためには国民一人一人が自分の問題として、高齢化社会をどのように生きるか考えることが必要である。

日本は、ますます人口減少と高齢化が進むことや一人暮らしの高齢者は増加することも予測されている。これからの保健、医療、福祉は、全ての国民の尊厳と自立性の支援が求められる。高齢になり一人暮らしになっても本人が望む地域で、望む生活を実現するためには国民一人一人が自分の問題として、高齢化社会をどのように生きるか考えることが必要である。

<引用・参考文献>

藤川君江、緒方浩志、林真紀、謝海棠、上里彰仁：消滅危惧集落で生きる一人暮らし男性後期高齢者の心理的葛藤、日本農村医学会雑誌、査読有、72巻6号、2024、535-543

藤川君江、五十嵐愛子、船山健二、ウイザー庸子、上里彰仁：デンマーク視察報告 高齢者入居施設、薬物依存症者支援施設、看護大学 -、アデクション看護、20巻2号、2023、2-10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 藤川君江、緒方浩志、林真紀、謝海棠、上里彰仁	4. 巻 72巻6号
2. 論文標題 消滅危惧集落で生きる一人暮らし男性後期高齢者の心理的葛藤	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本農村医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 535-543
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2185/jjrm.72.535	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤川君江、五十嵐愛子、舩山健二、ウイザー庸子、上里彰仁	4. 巻 20巻2号
2. 論文標題 デンマーク視察報告 高齢者入居施設、薬物依存症者支援施設、看護大学 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アデクション看護	6. 最初と最後の頁 2 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤川君江、林真紀、上里彰仁	4. 巻 第70巻第4号
2. 論文標題 中山間地の消滅危惧集落における1人暮らし男性後期高齢者を支える心理・社会的要因	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本農村医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 344-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2185/jjrm.70.344	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤川君江、広瀬 公治	4. 巻 69
2. 論文標題 過疎高齢化地域と都市近郊地域における高齢者の口腔状態、口腔保健行動および意識の比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 口腔衛生学会雑誌	6. 最初と最後の頁 218 ~ 222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5834/jdh.69.4_218	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kimie FUJIKAWA, Hiroshi OGATA, Haitang XIE, Maki HAYASHI, Akihito UEZATO
2. 発表標題 Factors Preventing Isolation of Elderly Men Living Alone in Disappearing Villages
3. 学会等名 26th East Asia Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kimie FUJIKAWA, Masayo AYUKAWA, Chidori MOMOSE, Akihito UEZATO
2. 発表標題 Self-Reliance Support for Elderly Men Over 75 Living Alone in Disappearing Villages in Hilly and Mountainous Areas
3. 学会等名 25th East Asia Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤川君江、緒方浩志、上里彰仁
2. 発表標題 消滅危惧集落で生きる80歳以上一人暮らし男性高齢者のこころの揺らぎ
3. 学会等名 日本人間関係学会 第30回記念全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤川君江、緒方浩志、戸田岳志
2. 発表標題 消滅危惧集落で生活する一人暮らし男性高齢者の自覚する古い 身体・心理・社会的状況の変化
3. 学会等名 日本看護福祉学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤川君江、森千佐子、田代千香
2. 発表標題 消滅が危惧される中山間地の一人暮らし男性高齢者が居住継続できる要因
3. 学会等名 日本人間関係学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤川君江、上里彰人
2. 発表標題 消滅危惧集落と地方都市近郊の高齢過疎地域で暮らす一人暮らし男性高齢者のソーシャルサポートの特徴
3. 学会等名 日本人間関係学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FUJIKAWA kimie
2. 発表標題 Factors for Continuity of Driving by Elderly Men Living Alone in Villages at Risk of Disappearing
3. 学会等名 The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤川君江
2. 発表標題 豪雪地域の一人暮らし男性高齢者が居住継続のための生活課題 消滅危惧集落の80歳以上の高齢者を対象として
3. 学会等名 日本看護福祉学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤川君江
2. 発表標題 超高齢社会における人間関係とオーラルフレイル
3. 学会等名 日本人間関係学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	緒方 浩志 (OGATA Hiroshi)		
研究協力者	上里 彰仁 (UEZATO Akihito)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------